

## 大造じいさんとガン（椋鳩十）

濱地 桃歌、森本 美乃里、山里 一成

## 一 作者と作品について

椋鳩十（本名・久保田彦穂）は、一九〇五年一月二十二日に長野県に誕生。旧制飯田中学（現・長野県飯田高等学校）を卒業後、法政大学法学部（のちの文学部）国文学科へと進む。大学在学中の一九二六年に詩集『駿馬』を発表する。その後、代用教員として鹿児島県に赴任するも、三か月で解雇される。その後、姉の紹介で同県の国語教師に着任する。仕事の傍ら作家活動を続け、一九三三年に最初の小説『山窩調』を自費出版する。この時初めてペンネームとして「椋鳩十」を用いた。

一九四七年に鹿児島県立図書館館長に就任し、その後十九年間にわたって勤務。一九六〇年には読書運動である「母と子の二十分間読書」運動を推進した。一九六七年からは鹿児島女子短期大学教授を務めた。一九八七年に逝去。享年八十二。

主な作品は、『片耳の大シカ』（昭和二十七年／文部大臣奨励賞）、『大空に生きる』（昭和三十六年／小川未明文学奨励賞）、『孤島の野犬』（昭和三十九年／サンケイ児童出版文化賞・国際アンデルセン賞国内賞）、『マヤの一生』（昭和四十六年／国際アンデルセン賞国内賞・児童福祉文化奨励賞）、『椋鳩十全集』（昭和五十八年／芸術選奨文部大臣賞）など。

「大造じいさんとガン」の初出は『少年倶楽部』昭和十六年十一月

号。書籍収録の際に「まえがき」が加筆され、「です・ます」調になった。昭和五十五年には和国特許委員会最優秀賞・児童学校学習最適賞を受賞しており、現在も小学校五年生の教科書に掲載されている作品である。

## 二 叙述について

じいさんは、七十二さいだというのに、こしひとつ曲がっていない、元気な老かりゆうどでした。

まず、ここでいうじいさんとは大造じいさんことである。「だというのに」という言葉から、大造じいさんが一般的な七十二才の年寄りとは異なり、元気であるということがわかる。「こし」ではなく「こしひとつ」と書くことで、腰をはじめとして、他の部位もびんびんしていることを表現している。「でした」は過去形であり、昔の話をしていることがわかる。

血管のふくれたがんじょうな手を、いろりのたき火にかざしながら、それからそれと、愉快なかりの話をしてくれました。



「血管のふくれた」手とは、日々体が使われていて、鍛えられているためにそうなる。また力があり頑丈であることも表している。この頑丈な手をいろいろにかざしながらとあるので、寒い季節であることがわかり、また、読み手に情景を伝えている部分でもある。「それからそれ」という言葉があることによって、次々と、すらすらと話をしている感じがする。「してくれました」とあるので、年長者であるじいさんへの敬意、話上手なじいさんへの敬意が読み取れる。

わたしは、その折の話を土台として、この物語を書いてみました。

ここでいう「わたし」とは大造じいさんから話を聞いて、この物語を書いている人物を指す。「その折」とは、「わたし」がイノシシ狩りに出かけ、栗野岳のふもとの大造じいさんの家に集まった時のこと。「土台として」から、話を少し変えている、大造じいさんの話を元にして作ったことがわかる。「書いてみました」とあるので、「こんな試みしてみましたか、どうでしょう」というように、読者に投げかけている感じがする。「書きました」「書き上げました」に比べて、少し軽い印象を受ける。

左右のつばさに一か所ずつ、真っ白な交じり毛をもっていたので、かりゅうどたちからそうよばれていました。

ここでは残雪の名前の由来について書かれている。「そうよばれていました。」から、残雪がかりゅうど達の間で有名であることがわかる。

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、なかなかりょうなやつで、仲間がえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りょうじ

ゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。

ここでいう「らしい」は、伝聞や推量ではなく、「ふさわしい」の意を持つ。「なかなか」という言葉には、「鳥にしては」というニュアンスが含まれており、人間が優位であることがわかる。「えをあさっている間も」から、その他の場面でも油断なく気を配っていることがわかる。「決して」は、絶対に無いこと、今までに一度も起こったことが無いことを表している。「人間を寄せつけませんでした」とあるので、人間が近づいてきた時には素早く飛び去ったことがわかる。また、ガンと人間が敵対していることが、この部分から読み取れる。

じいさんは、思わず子どものように声を上げて喜びました。

「思わず」「子どものように」から、自制が効かない様子を表している。また、「子どものように」という、一見大人の男とはミスマッチな言葉を使うことによって、意外性のある喜び方がわかる。「声を上げて」からは、つい、感極まってという感じを受ける。

しかし、大造じいさんは、たかが鳥のことだ、一晩たてば、また忘れてやってくるにちがいないと考えて、昨日よりも、もっとたくさんをつりばりをばらまいておきました。

「たかが」から、鳥をばかにしているじいさんの心情が伺える。「また忘れてやってくるに違いはない」という表現から、じいさんの自信が感じられる。「もっとたくさん」からは、次はもっとたくさん捕るぞという、意気込みとうぬぼれを読み取ることができる。「おきました」があることによって、ばらまくという行為がより準備された、意図的なものであるように感じる。

ガンとかカモとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほうではないといわれていますが、どうしてなかなか、あの小さい頭の中に、たいしたちえをもっているものだなということを、今さらのように感じたのであります。

「あまりりこうなほうではない」という表現は、今までのガンに対する叙述に比べて柔らかい印象を受ける。文の後半でガンを褒めているため、意図的に柔らかくしたと考えられる。「どうしてなかなか」という言葉は、前に述べた言葉を、意外だという意を込めて否定する意を表す言葉である。つまりここでは「意外だ」ということを、感嘆の意も込めて表している。「小さい頭」と「たいした」とを一緒に使うことにより、後ろの「たいした」がより大きなものとして際立つ効果がある。「だな」からは感嘆の意を読み取ることができる。「今さら」から、改めて確認したことがわかる。

りようじゆうをぐつとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのです。

「ぐつと」から力がこもっている様子が伺える。「びりびり」という表現はあまり使われないが、「びりびり」や「びんと」といった表現と比べてより緊張感を漂わせる。「大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのです」という表現には、意図して気を引き締めたというよりは、戦いを前にして、自然と気持ちが高揚し、緊張している大造じいさんの様子が表れている。

そして、ふと、いつものえさ場に、昨日までなかった小さな小屋をみと

めました。

「ふと」から見落としてもおかしくない程度の異変が、あまり意図せずに残雪の視界に入ってきたことがわかる。あまり意図せずという表現ではあるが、沼地全体を残雪が細心の注意で観察していたからこそ発見できたのである。「みとめ」という表現からはただ見つけただけでなく、その存在を認識して心に留めている、何かを考えている様子が感じられる。

もう少しでたまのどくきより入ってくる、というところで、またしても、残雪のためにしてやられてしまいました。

「もう少しで」という言葉は「期待と失敗」をうかがわせる。「というところで」を讀点で挟み込んで文章に挿入することで、区切って読むことを促し、語りに臨場感が出る。「またしても」と言う表現は基本的な意味は「再び」と同じであるが、よくないことに使われる。「てしまいました」という言い回しは、「してやられるつもりはなかったのに、してやられた」ことを表している。また、この場合は当てはまらないが、よくないことをした場合にも使われ、その後には何かが起こることを予測させたい場合にも使われる。

大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、

「ううん。」

と、うなつてしまいました。

ただの「ぬま地」という描写ではなく「広いぬま地」と描写することで、場面を思い浮かべた時に大造じいさんを小さく感じさせ、哀愁のようなものを感じさせる。「じっと」から悔しさなどよりも呆然とし

た雰囲気を感じられる。「まま」という表現からは出来事との区切りがついていない様子が伝わってくる。「てしまいました」からは、「うなるつもりはなかったのにうならされた」ことが読み取れる。

今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にガンの来る季節になりました。

「今年もまた」から、これまでの繰り返しであることがわかる。大きな場面の初めを「今年も」「その翌年も」といった同系統の言葉で始めることで、物語の構成がわかりやすくなる。「ぼつぼつ」からは空間に何らかの集合体が点在していく様子が感じ取れる。この場合はガンの群れ。「ぼつぼつ」だとその集合体が小さい印象をうける。「ぼちぼち」だと出来事の進行の時間の面により焦点化されているような印象を受ける。また、「ぼつぼつ」は「ぼちぼち」とほぼ同じ表現で、「徐々に」という意味だとする考え方もできる。私たちの班では前者を取った。「例の」がつくことで、「ぬま地」でこれまでに様々なことがあったことを感じさせる。

今では、すっかりじいさんになっていました。

「今では」から、捕らえた当初は全然なついていなかったことが予想される。「すっかり」からなつき方が並大抵ではないことが窺える。

さて、いよいよ残雪の一群が今年もやって来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけていきました。

「さて」は場面、話題の転換。「いよいよ」から、長らくこの日を待っていたことが窺える。この場合は、大造じいさんがこの日を待ち望んでいたということ。「出かけ」という表現は「行く」よりも目的意

識が強い印象を受ける。「ていきました」という表現からは、「出かけてい」ったことを語りかけている感じが伝わる。

「うまくいくぞ。」

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりとしました。

この一文からは大造じいさんの落ち着きと自信が感じられる。「青くすんだ空」からは悪いことが起こるといふ予想はしづらい。また、ここまで「たまの」とどききよりの三倍もはなれている地点を、えさ場になっている」とあるにもかかわらず「にっこり」と笑っていることからも圧倒的な自信と落ち着きを感じられる。

そして、冷え冷えするじゅうしんをぎゅつとにぎりしめました。

「冷え冷え」は、銃身がただ冷たいというだけでなく、芯まで冷たく凍りつくような印象を与える。温度はその場の雰囲気と密接に関わっており、じりじりとした暑さも緊張感を感じさせるが、冷え冷えという表現から受ける冷たさは、より研ぎ澄まされた緊張感を感じさせる。「ぎゅつとにぎりしめ」という表現が繰り返されることで構成がわかりやすくなり、次におこることを予測しやすくする効果が考えられる。逆にそれを裏切ることで、より大きな意外性も生まれる。

じいさんは目を開きました。

短い一文が入ることでテンポが上がり、臨場感が出る。またこの一文からは大造じいさんの強い覚悟めいたものが感じられ、これも一文に余計な情報がなく目だけがピックアップされていることによるものである。このときに思い浮かべるであろう映像をうまく操っている。

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」

「さあ」は大造じいさんの気合いの表れ。「こそ」と強調しているのもやはり気合いの表れからであろう。またこれまで失敗続きであったことも思い出され、苦々しさも感じ取れる。「あの」からは今まで残雪にしてやられた様々なことを、大造じいさんが思っていることがわかり、畏敬のような念も感じられる。「め」からは相手を忌々しく思っている様子が伺える。「ぞ」からも気合いが感じられる。総合すると、とにかく一矢報いたいという大造じいさんの強い思いが感じられる。

と、そのとき、ものすごい羽音とともに、ガンの群れが一度にバタバタと飛び立ちました。

「と」という出だしによって、直前の一文をふまえている。「口笛をふこうと、くちびるをとんがらせた」瞬間のこと。「ものすごい」という表現からは、迫力があり、数も多く、圧倒されていることがわかる。「二度にバタバタ」とは、ガンの群れが秩序なく一斉に飛び立っている様子を表している。

ガンの群れを目掛けて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。

「雲の辺りから」という表現から、かなり高い所であることがわかる。「何か一直線に落ちてき」たとあり、何かはわからないが、まるで銃弾のような勢いで真つ直ぐにガンの群れに向かってきたことがわかる。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきの姿勢をとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。

「もう一けり」はとどめの一撃か。「さっと、大きなかげが」とあり、何かはこの時点ではわからないが、大きなものが素早い動きで「空を横切」ったことがわかる。

残雪です。

「大きなかげ」の正体が残雪であることが判明する。一文を短くすることで、残雪の存在を際立たせている。

が、なんと思っただか、再びじゆうを下ろしてしまいました。

「が、」という出だしによって、直前の文と間を置かない感じがし、語りのような効果を生み出している。また、後に続く内容の意外性を引き立てている。「なんと思っただか」という表現は、語り手・聞き手から見ると不思議であることを示している。「しまいました」というのは、マイナスの意味を含む。「じゆうを下ろす」行為は、かりゆうどにとつてはミスといっている。「下ろしてしまいました」という表現は、「下ろすつもりはなかった」という意味と、「なぜ下ろしてしまったのか、意外だ」という意味の二つの取り方ができる。

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。

「不意を打たれて」という表現から、ハヤブサが驚いていることがわかる。ガンが向かってくるという経験は今までになかったと思われる。「さすがの」から、ハヤブサが強い、絶対的な存在であることがわ

かる。「ふらふら」とは、残雪の攻撃がハヤブサに効いている様子を表現している。

しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。

第一の「おそろしい敵」はハヤブサ。「ぐっと」から、一生懸命力を入れていく様子がわかり、「長い首」は残雪の大きさを表している。「残りの力」とあることから、力を使い切る直前で、死が意識されることが読み取れる。

それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

「それ」とは、堂々と「じいさん」に対峙する残雪の様子。「とはいえ」から、鳥であるにも関わらず、人間に引けを取らない立派な態度であることがわかる。「いかにも」という表現は、頭領のような雰囲気がよく表れていることを示している。「らしい」は「ふさわしい」という意味。

それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきずつけまいと努力しているようでもありました。

「最期の時」という表現から、死を覚悟している様子がわかる。また、「せめて」から、死ぬことを前提としていることがわかる。「まい」は残雪の意志を表し、「も」は「じいさんから見るとそうも思えた」という意味を含んでいる。

残雪は、あの長い首をかたむけて、突然に広がった世界におどろいたようでありました。

「あの長い首」とは、「ぐっと持ち上げ」た「長い首」のことである。「突然広がった世界」という表現から、「おりのふたをいっばいに開けたことがなかったことがわかる。「よう」とは、じいさんから見たところという意味。

らんまんときいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。

「らんまんときいた」から、スモモの花が生き生きと咲き誇っている様子がわかる。「当たって」ではなく「ふれて」とすることで、軽い感じが伝わる。「雪のように清らかに」とは美しい様子を表しており、「雪」は残雪を想起させる。「はらはらと」は、軽く不規則に、力なく落ちる様子を示している。

### 三 考察

#### (一) 大造じいさんと残雪の関係性について

この物語には、大造じいさんと残雪が主な登場人物として描かれている。そしてこの二人の関係性は、物語が進むにつれて変化している。そこで、本文に従いこの二人の関係性の変化について考察していく。しかし、残雪の心情を読み取れる部分はないため、主に大造じいさんの気持ちの変化に着目して考察することとする。

まず物語冒頭では、大造じいさんがかり場とするぬま地に残雪がやって来るようになってから、一羽のガンも捕れなくなったと書かれて

いる。そのため「いまますます思っていました。」という記述もあり、大造じいさんの残雪に対する憎しみ、うっとうしさを読み取ることができる。しかし、「生きているガンがうまく手に入ったので、じいさんはうれしく思いました」と、ガンをとることができて素直に嬉しい気持ちが表示されているので、この時点では残雪に執着しているというよりは、ガンを捕ることに對して一生懸命な印象を受ける。

それから大造じいさんは、もう一度タニシによる仕掛けをかけるが、残雪の機転によってこれをかわされてしまう。それに対して「思わず感嘆の声をもらし」、「たいしたちえをもっているものだ」と、感心している。このことから、今までガンを利口でないと馬鹿にしていたが、この出来事をきっかけにガンを、残雪を見直したことがわかる。その後、ガンのいない夏のうちから次の作戦を心がけたり、より巧妙な罠を仕掛けたりしていることから、ガンを知恵のあるものとして扱う姿勢が見受けられる。

大造じいさんはそれから毎年のように残雪と知恵比べをするが、どうしても勝つことができない。「さあ、今日こそ残雪めにひとあわふかせてやるぞ」ともあるように、この時にはガンを捕るといふよりは、残雪に一矢報いること、残雪に勝つことが目的になっている。

ここで問題となるのが、「残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間の姿があったのです。」という文だ。これは誰が考えた言葉なのか。ガンが言葉を話すことはないの、わたしたちの班では大造じいさんが考えたという説と、書き手である「わたし」が考えたという説が上がった。もしも前者ならば、じいさんが残雪を対等に扱う気持ちだが、残雪を人間のような思考を持つ存在として表現させたと考えられる。このあたりから残雪の気持ちを代弁

するような記述が多くなることも気になる。もしも後者ならば、物語を読み手にわかりやすく、かつおもしろく伝えるために残雪の気持ちを補っていると考えられる。これは冒頭の「その折の話を土台として、この物語を書いてみました。」を根拠としている。

「大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に對しているような気がしませんでした。」とあるので、この時点で大造じいさんにとつて残雪はただの鳥ではなく、それ以上の存在であることがわかる。また、強く心を打たれているので、相手に対して感動、尊敬、またはそれらに類する感情を有していると考えられる。

そして最後には、「おうい、ガンの英雄よ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきようなやり方でやっつけたかあないぞ。なあ、おい。今年の冬も、仲間を連れてぬま地へやって来いよ。そうしておれたちは、また堂々と戦おうじゃあないか。」とある。大造じいさんが独り言ではなく、話しているのは、ここが初めてである。そのため残雪のことを対等なものとして扱い、英雄として尊敬の気持ちがあることが読み取れる。また後半では、また堂々と戦おうとあるので、二人の関係がライバル関係であると考えられる。

以上、本文に即してじいさんと残雪の関係性を見てきた。まとめると、冒頭ではじいさんにとつて残雪は、狩りを邪魔するいまましいガンの中の一羽でしかなかったが、毎年毎年繰り返される知恵比べを通して、ガンの中から残雪が知恵のあるものとしてクローズアップされ始める。そしてじいさんの目的はガンを狩るというよりは、残雪に一泡ふかすことにかわっていく。そんな中起きたハヤブサの事件がきっかけで、じいさんは残雪を堂々としていて、立派であると認め、これからも対等なライバルとして戦い続けることを宣言する。

## (二) 情景描写・場面の描写について

『大造じいさんとガン』では全体を通じて場面の描写が特徴的である。一つ一つの描写が、読み手が場面を映像化する時の事を意識して書かれているようにも感じる。これはこの物語が、大造じいさんから聞いた話を、筆者が読者に語っているという形式をとっていることが大きな要因であろう。そこでここでは『大造じいさんとガン』における情景描写・場面の描写について考察する。

まず冒頭の「さあ、大きな丸太がパチパチと燃え上がり、しようじには自在かぎとなべのかげがうつり、すがすがしい木のおいのするけむりの立ちこめている、山家のろばたを想像しながら、この物語をお読みください。」という描写は、読者自身が居る場所を想像するように投げかけており、読み手（聞き手）を強く意識していることがわかる。ただし、この部分はのちに加筆された部分であるので、始めはそれほど読み手を意識していたわけではなかったのかもしれない。

次に、「秋の日は、美しく輝いていました。」という一文である。この一文はここまでの流れを遮るかのように突然挿入されており、違和感さえ感じさせる。その違和感は、おそらくそれまでの文章と比べて語りかけるかのような言い回しがあまり感じられないことと、短く情景だけを描写していることからくるものである。しかし後に出てくる、「あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れこんできました。」「東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。」という二文を合わせて考えると、残雪との戦いの前に挿入されていることがわかる。そこから考えると、大造じいさんの心情を表した情景描写であると取れる。一度目の戦いであるこの部分では、美しく輝く秋の日は描かれており、

大造じいさんの心持ちも、どこか穏やかであったという事であろう。

「あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れ込んできました。」と言う一文では、「あかつき」という単語が採用されていることがまず、違和感を感じさせる。ここまでの文章の流れなら「朝の日の光」などが妥当であろう。そもそも児童文学に登場させるには少し難しい言葉である。そこをあえて「あかつきの光」としたのは、読み手（聞き手）をこの部分に注目させようという狙いがあったのだろう。そのような意図も含めて、第二の戦いの前の大造じいさんの心情を考えると、確かにすがすがしさは残ってはいるものの、あかつきと言う単語の音からくる鋭さ、また純粋なオレンジ色とは違うほの暗い雰囲気も同居しており、静かに闘志を燃やしている様子が読み取れる。

「東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。」はこれまでの描写よりも赤が強調されており、激しさを感じさせる。燃えるという表現からも三度目の戦いを前に大造じいさんの気持ちがいこれまでよりも高ぶっていることが伺える。

ここまで三度ある戦いの前に挿入されている一文と大造じいさんの心情の関連について考察した。ただし、これらの文は大造じいさんの心情を表しているだけではなく、三度ある戦いがどのようなものであるかを、始めに示しているとも考えられる。

読み手（聞き手）を強く意識している大造じいさんとガンと言う作品において風景の描写は、読み手（聞き手）がその場面、雰囲気映像化するために非常に重要な役割を担っている。その点において三度の戦いの前の一文は印象深いものである。

ここまでに取り上げた部分以外にも、叙述の部分では取り上げたが、「広いぬま地」という表現は、広いぬま地をイメージさせることによ



って大造じいさんの取り残されている様子を効果的に描いている。「白い羽毛があかつきの空に光って散りました」「羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。」「らんまんとさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。」といった表現はそれぞれ、白色を中心に美しく描写されている。いずれの文も動きが感じられ、映像として想像しやすい。

ここまで見てきたように『大造じいさんとガン』においては場面の描写が大切にされていることがわかる。筆者が何を意識しているかというところまで考えると、作品のより深い部分が見えてくるだろう。

